

リスニング授業における効果的な CALL の使い方

杉 本 孝 子

1. はじめに

大学では、CALL 機器の更新時や新学期の始まる前に CALL の機器操作説明会がよく開かれている。メーカーのスタッフのデモンストレーションを見ていると、どの機能も便利で使ってみたくなる。しかし実際に授業で使ってみるとうまくいくもの、いかないもの、授業の目的に合うもの、合わないものがあると気づく。そして毎回の授業を重ねるごとに、使いやすい機能を中心にした授業の形が定着していく傾向がある。それが効果的な形になっていけばよいが、いつのまにか単調な繰り返しに陥ってしまう可能性もある。

さて、ここで最近の CALL 機器を見てみると、インターネットや動画の利用を前提としているせいか、多機能になってきている。その分、操作が大変であるかといえば、むしろ手間を取らずに簡単にできるようになり、操作性は安定しているといえよう。従って、先に述べたように「授業で使ってみるとうまくいかない」とは、機器の調子が悪いという意味ではなく、期待したほどの学習効果が出せていないという教師側の反省である。

このように CALL の操作そのものは問題なくできても、やっている事が授業の中であまり効果的でないような時は、その原因はどこかにありそうである。こうした事態を単に「CALL を使いこなせていない」と片づけけないで、その原因のありかを探ることは、CALL の使い方を向上させる上で役に立つはずである。特に最近の CALL は多機能になってきているので、それぞれの機能の特性をよく知り、その機能と使い方を再点検することは円滑な授業運びのヒントを得ることにつながるかもしれない。

そこで本論では、平成 27 年前期に担当した専修大学文学部のリスニング

の授業を対象に、使用頻度の高い CALL の機能の使い方を振り返ってみることにした。そしてどんな時にその効果が出ていたのか、あるいは出ていなかったのか、またそのように実感した根拠はどこにあったのかを考えてみたい。なお、ここで問題なのは CALL 機器の操作性の良し悪しではなく、あくまでも授業の中での CALL の使い方なので、授業の流れや目的と照らし合わせて考察することにした。

では、本論に入る前にこの授業の教室環境を紹介することとする。使用した CALL システムはチエル株式会社のマルチメディア語学教育支援システム CalaboEX v7.1 である。教師と学生のパソコンの OS は Microsoft の Windows 8.1 である。使用した CALL 教室は専修大学 1 号館の A 教室で座席数は 56 席である。学生と学生の机の真ん中にセンターモニターが設置されており、教員のパソコンの状態や書画カメラに映る資料はすぐに見せることができる。このような教室環境で、2015 年前期の金曜日 3 限にリスニング授業として Advanced Listening 3 の授業を行った。

2. Advanced Listening 3 の授業と CALL の利用

Advanced Listening 3 は文学部 3 年次以上が履修する専門科目で、1 年生と 2 年生で養ったリスニング力をさらに高めることが求められる。授業では教材としてインターネットを使うことに加え、教員側のモニタリングも重要視したので CALL の利用は必須条件であった。

3. クラスの様子と教材

このクラスの前期履修者は 48 名で、その内の 30 名は 3 年生、18 名が 4 年生とそれ以上の学年である。例年の傾向として、このクラスの履修者数はだいたい 48 名か、それを少し上回るくらいなので、履修者数そのものはあまり変わらなかった。しかし、全体の出席状況をよく見てみると、出席回数が少ない学生の数やや増えた。

リスニング力については、クラスの中でかなりの差があり、授業時のモニ

タリングの様子や期末テストにその結果が表れていた。とはいえ、授業で使う教材のレベルは力不足の学生でも予習復習で補える範囲なので、どちらかといえば、よく努力する学生とあまりしない学生との間にかかなりの差が出たとみた方がよいかもしれない。

次に教材についてであるが、この授業では教科書を使わず、インターネット上の学習サイトを利用した。アメリカの対外放送であるボイス・オブ・アメリカの Voice of America – Learn American English with VOA Learning English (<http://learningenglish.voanews.com/>) というサイトで、音声のダウンロードやスクリプトの印刷ができるようになっている。発音のスピードは一般のニュース報道に比べてゆっくりで、語彙のレベルは英語学習者向けに調整されている。このサイトを利用した理由はいくつかあり、主なものをまとめると以下ようになる。

- (1) 音声のスピードがゆっくりで語彙数も限定されているので、クラス全員が消化できる。
- (2) ゆっくりしたスピードなので、シャドウイングや同時通訳練習に使いやすい。
- (3) 政治、経済、教育、科学、環境など豊富な話題に関する表現や語彙を音声や動画を通じて覚えることができる。
- (4) VOA のサイトが毎週更新されるので、新鮮な話題を提供できる。
- (5) インターネットが接続できる環境ならいつでもどこでも勉強できるので、予習や復習がしやすい。
- (6) VOA のサイトの関連情報は発展学習として、クイズは全員参加の理解度テストとして利用できる。

以上に加え、間接的な理由として、インターネット学習を一度でも体験すれば、卒業後に自分で勉強する必要が生じた時に役立つのではないかという期待もあった。

4. 毎回の授業の流れと CALL の使い方

毎回の授業の流れは、最初に当日の VOA の概略をつかみ、次に難しい語彙を覚え、最後に全体の細部まで聞き取れるようにするという形で進行している。この流れの中に、CALL を使ったいろいろな聞き方や練習を入れてどの程度まで聞けたかを学生と教員の双方がチェックできるような仕組みである。

結果的に同じ音声を数回聞くことになるので、リスニングに慣れて音声の表す内容を理解できるようになることを目指している。

以下はそうした授業の流れに合わせて授業で実際に行ったことである。主なものを (1) から (12) の順にまとめ、その目的や CALL の使い方を付け加えた。

(1) 口頭で出席をとる。

目的：対面で出席状況を確認する。その間に当日の教材内容を見せる。

CALL の使い方：当日の VOA のサイトを学生のセンターモニターに映す。



(2) 小テストを行う (前回の教材について単語テストと発音テストを行う)

目的：単語テストや発音テストでリスニングの基礎固めをする。

CALL の使い方：学生の発音テストは「ムービーテレコ」で行う。初めに教員の「ムービーテレコ」を「Self-Learning モード」にしておき、学生に自分の「ムービーテレコ」で録音させる。教員は学生の録音が終わった頃に「提出ボタン」をクリックして学生各自の録音ファイルを提出できるようにする。最後に、教員は提出済み音声ファイルの一覧を学生用センターモニターに映す。



(3) 当日の VOA の英語全体を聞かせる。

目的：内容の概略を聞きとらせる。

CALL の使い方：デスクトップに保存しておいた VOA の音声ファイルを学

生に配布する。学生にヘッドセットをつけさせ、VOAの音声を聞かせる。

(4) 授業開始から30分後にCALLで出席を取る。

目的：出席状況の再確認を行い、遅刻者を記録する。

CALLの使い方：「出席管理ボタン」で出席を取り、出席結果ファイルを保存してから印刷する。



(5) VOAの英文スクリプトを見せ、難しい語彙や表現を説明する。

目的：知らない単語や表現を覚えてリスニングの基礎固めをする。

CALLの使い方：教員パソコンのVOAのサイトを学生用センターモニターに映す。



(6) ペアワーク、シャドウイング、同時通訳練習などから、どれかひとつを行う。

目的：より高度な練習で、意味がわかっているか、細部まで聞き取れたかを試す。

CALLの使い方：ペアワークは「会話」ボタンをクリックして2名のペアを「ランダム」で組み、英文スクリプトを交互に読ませたり、通訳をさせたりする。

シャドウイングは、学生にVOAの音声ファイルを開かせ、英文スクリプトなしで聞いた英語をそのまま発音させる。同時通訳練習は学生にVOAの音声ファイルを開かせ、英文スクリプトなしで英語を聞きながら日本語にさせる。

以上三つの練習は、教員が「モニター」機能でチェックし、必要ならば「インカム」機能でアドバイスをする。



(7) スピーカーからVOAを流し、重要な箇所まで止め、教員が英語または日本語で質問をする。学生はその質問に対する答えを各自パソコンでまとめ、ワー

ドの文字ファイルとして提出する。

目的：VOA の内容の要点が理解できたかどうか試す。

CALL の使い方：教員パソコンの **VOA** 音声をスピーカーで流し、所々で止めて口頭で質問する。学生はその質問に対する答えをパソコンでまとめる。教員は全員が終わった頃に「提出」ボタンをクリックし、学生に答えのワードファイルを提出させる。教員は提出者済み学生の一覧表を学生用センターモニターに映す。



(8) 発展学習として、VOA の関連サイトを解説する。

目的：VOA のサイトにある関連サイトを開いて、より高度な内容を聞かせる。

CALL の使い方：教員パソコンの **VOA** の関連サイトをクリックして開き、それを学生用センターモニターに映す。同時にスピーカーから音声を流し、教員の説明を加える。



(9) ここまでの学習状況のモニタリング結果を発表し、消化できていない箇所を補う。その他、まだ覚えていない表現や単語は、教員と学生全員の対面の口頭練習で覚える。

目的：CALL による個別学習から全体学習に切り替える。



(10) 学生にヘッドセットをつけて VOA を聞かせ、それに合わせてスクリプトを読ませる。または、VOA を再度聞かせる。

目的：授業の最初と最後でどのくらい聞き取りのレベルが変わったかを点検させる。

CALL の使い方：学生に音声ファイルを開いて読ませたり、聞かせたりする。教員はモニタリングをする。



(11) 次回授業の VOA サイトを紹介して授業を終わる。

目的：次回授業の予習を促す。

CALL の使い方:教員パソコンに次回のサイトを出し、それを学生用センターモニターに映す。

(12) 学生にサインアウトするように口頭で伝える。

目的：個人情報の管理やパソコンを使う人へのマナーを伝える。

CALL の使い方:教員パソコンをサインアウトにして、その画面をセンターモニターに映す。

以上が平均的な授業の流れである。ただし、VOA の内容が政治や経済に及ぶ場合は背景知識が必要になることがあるので、インターネットの関連サイトで説明をしてから授業に入ることもよくあった。このように授業展開が変わる場合は、他の練習の時間を短くして調整をした。

また、クラスの雰囲気が単調さに流されそうになった時は、気分展開を兼ね、いままでと違う CALL の使い方を取り入れた。その際は、教員中心の CALL の使い方よりは、学生中心の使い方を選ぶようにした。例えば、「会話機能」で行うペアのシャドウイングや、「ムービーテレコ」による録音など、学生が主体的に参加できる内容である。授業に新鮮な空気を送り込みたい時は、CALL の多機能性を積極的に活用した。

5. CALL を使った授業の反応

ここでは前項 4 の (1) から (12) の CALL の使い方について、授業の中でどのような反応があったかをまとめた。

(1) センターモニターによる当日の授業内容の紹介について

授業前に当日の VOA のサイトをセンターモニターに映しておく、自分からそのサイトにアクセスしたり、友達と一緒に見ている学生の姿が見受けられた。

また、出席の返事を終えた学生は自然とその画面を見ていた。

(2) 「ムービーテレコ」による録音の小テストについて

学生が「ムービーテレコ」で VOA ニュースを読んで録音する作業は、慣れないうちは少しトラブルがあったが、回を重ねるごとに普通にできるようになった。また録音済み音声ファイルの提出については、CALL がきちんと処理できないことが2回程あったが、それ以外は問題なくできていた。

教員にとってみれば、小テストの時間配分は限られているので、短い時間で正確に録音できることは必須条件である。CALL 機器のトラブルさえなければ、録音、保存、提出、提出確認の一連の作業が5分ほどで終わるので、効率的な授業展開が期待できた。録音した音声のチェックは、LL 教室の場合と違って学生のカセットテープを回収する必要がないので、ためらいなく行うことができた。

(3) 音声ファイルの配布について

リスニング授業では音声配布は何回か行うので、配布作業が簡単にはやくできて無駄な時間を減らすことができた。

(4) CALL による遅刻者確認について

口頭で学生の名前を読んで確認する必要があるないので、授業を中断せずに遅刻者の記録を取ることができた。

(5) センターモニターを使った英文スクリプトの解説について

VOA のサイト上のスクリプトをセンターモニターに映せば一目瞭然なので説明に手間取らなかった。おまけに小さい文字は拡大できるので、クラス全員が手元ではっきり見ることができた。リスニング授業では、聞き取りにくい箇所の説明をすることが度々あるので、センターモニターはとてもよく使った。

(6) ペアワーク、シャドウイング、同時通訳練習について

ペアワークは、「会話」ボタンですぐにペアが組めたが、相手の声が聞こえないことが数回あった。そういう場合は練習できないペアが生じるので、会話機能については、もう少し操作上の安定性がほしいと感じた。その他、シャドウイングや同時通訳練習は学生の音声ファイルで行ったが、特に問題

はなかった。

(7) 学生ひとりひとりの聞き取りチェックについて

クラスの学生全員に VOA を聞かせながら、所々で質問をして答えさせるワークはよく行った。あらかじめいくつかの質問を用意しておき、音声止める箇所はスクリプトに印をつけておいたので、比較的スムーズにできた。

学生の方は、英語を聞いてすぐに答えを書かねばならないので緊張した面持ちで取り組んでいた。答えのタイピング中に教員のモニタリングが入るせいか、何も書かない学生は少なかった。こうした聞き取りによる内容理解度チェックは実力差が出やすいので、すぐに答えが出せない学生にはヒントを出して応援した。全般的に単語だけで答えを書く学生が多いので、文として書けるようにアドバイスもした。

(8) センターモニターによる関連サイトの紹介について

VOA の関連サイトはクリックひとつで開けるので、センターモニターに映してよく解説をした。手間がかからないので時間的な制約を気にせずにできた。

(10) 発音のモニタリングについて

巡回のモニタリングでおおよその状況を確認することができた。

(11) センターモニターによる次回授業のサイト紹介について

リスニング力不足と感じている学生には次週のサイトを見せて予習を勧めたが、効果はあまり期待できなかった。その一方で教育実習のために授業に出られない学生は自習に使っていた。

(12) センターモニターによるサインアウトの指示

サインアウトは口頭で伝えるだけでなく、サインアウトの画面も見せるようにしたが、全員に浸透するまではいかなかった。

以上が CALL を使った授業の反応である。(1) から (12) を通してみると CALL のトラブルがあったのはほんの数回で、「会話」機能の不具合などがそれにあたる。選んだ機能がきちんと作動しないと授業が中断してしまった

ように感じるのは、この授業形態が CALL というシステムや関連機器に支えられているからであろう。しかしよく考えてみれば機器のトラブルは授業を中断させるとはいえ、ほとんどは一時的なものであり、授業全般に影響を及ぼすものではない。授業はひとつの機能に集中するわけでもないし、すぐに復旧できなければ、他の使い方で代用することもできる。

そうした観点からすれば、全体の授業展開が滞らず、授業の目的の達成に沿うように CALL が機能しているという点において、CALL 授業として成立しているとみることはできるであろう。だが、実際に CALL を使って授業をしている立場からすると必ずしも満足できるわけではない。CALL がうまく使えているか、いないかという評価を担当者自身の中におくと、CALL 授業特有の評価基準が見えてくるからである。

6. CALL 授業の評価基準について—教員の立場から

ここでいう評価基準とは、学会などで広く定義されるものではなく、それぞれの CALL 授業を担当する教員の立場からみた評価基準である。周知のように、CALL 教室はシステムや関連機器、机の配置、座席数などそれぞれに違い、その教室で何をどう教えるのかも違う。従って CALL 授業の評価基準は様ではなく、教員によっても違うであろう。

さらに付け加えるならば、評価に関しては教員側だけでなく学生側の興味や関心、あるいはモチベーションなども考慮せねばならない。また教員側の問題として、教え方、教材のレベル、クラスサイズ、クラス編成の方法などを検討する必要がある。しかし、ここではそうした総合的な評価は別の機会に譲り、あえて CALL 授業を行う教員にとって見えてくる基本的な評価基準とは何かを考えてみたい。

7. LL から CALL に一貫しているモニター機能

CALL の前身である LL は音声中心の外国語学習に対応する機器として長い間、高校や大学で使われてきた。LL は音声の録音と再生が主な機能であっ

たために、応用的な LL の使い方も音声中心であった。例えばペアワークやグループワークなど、音声でしかできない会話練習であったし、モデル機能も音声のみであった。教員のモニタリングも同様に耳から発音を聞くという形で行われた。

今から思えば、使える機能は限られていたが、それでも学生の発音を聞いて助言ができるという機能は、教師にとって頼りになるものであった。学生ひとりひとりの声がはっきり聞こえるので教師は自信を持って助言できし、学生の方でもしっかり聞いてもらっていると思うとやる気が出るからである。

特に教師にとって、その場の学習状況をモニタリングで把握できる事は大きな意味があった。学習がどの程度まで消化できているかを確認しながら授業を進めることが普通にできるようになったからである。その結果、「学生の学習状況をよく見て(聞いて)授業をしているか」という評価の基準が当たり前のように教師の中に定着していったのである。LL 教室でも CALL 教室でも教員はヘッドセットをつけるが、それは学習状況を耳から把握するという意味を持ち、CALL でも共通である。

では、LL から CALL に変わった現在は、何が大きく変わったのであろうか。そもそも、コンピュータでできることが多様である以上、外国語教育の可能性が大きく広がったのは間違いないであろう。特にインターネットによって、提供できる学習内容が格段に増えたのは事実である。実際に LL の機能は CALL に吸収され、CALL はさらにインターネットとの関連性を深めている。

ここでモニタリングに話を戻すと、学生の机の上にあるものがカセットデッキからパソコンに変わったということはモニタリングできるものが音声だけでなく、文字も加わったと言うことを意味する。LL ではできなかった文字の確認ができるようになり、聞いた内容をワードで書かせて理解度を視覚化することが出来るようになったのである。つまり、学習状況のモニタリングはより正確にできるようになったということである。こうしてみるとモニター機能は LL の時代から一貫して基本的機能として働き、外国語教育の

土台を担ってきたと言える。

8. 授業から見えてくるもの—効果的な CALL 授業とクラスサイズ

ここで Advanced Listening の授業を振り返ってみると、既に見たように CALL のいろいろな機能の使い方は問題がなかったし、多少のトラブルがあっても、それが授業全体に影響を及ぼすものではないということがわかった。

だが、それでも授業がなにかうまくいっていないと感じるのであれば、最初にすべきことは CALL 授業の基本について、つまり学生たちを十分にモニターできていたかを振り返ることであろう。学生のひとりひとりをよく見て授業ができていれば CALL の使い方は自然に学生に合わせることができるし、教える側は自信を持つことができるからである。CALL の授業内容と学生数の関係はこれまであまり議論されなかったかもしれないが、より効果的な授業を目指すのであれば、適正なクラスサイズを検討することは大切である。

一般にクラスサイズが大きくなると、リスニングのような音声中心の授業ではモニタリングに時間がかかるので、一人一人のモニター時間が短くなったり、モニターをクラス全員に行うことができなくなる。これまでの経験からするとリスニング授業では、30 名以上のクラスサイズになると、モニタリング不足が生じやすい。

また同じ CALL 授業でもライティングの授業では、モニター対象は音声ではなく文字なので、リスニング授業よりはモニタリングに時間がかからない。従ってクラスサイズはやや大きくても対応できる。つまり、CALL を使う場合は授業内容に合うクラスサイズがあり、それを超えるとモニタリングに限界が出てくる。

こうした点を Advanced Listening の授業に当てはめてみると、流れている音声を扱うアナログ的な要素が強いので、クラスサイズはもう少し小さくてもよかったと思われる。このクラスは選択クラスなので人数が多めになるこ

とはあるが、その場合はこの点を補う方法を考える必要があると言える。

さて、最後に CALL 授業を行う上で心掛けている点を次のようにまとめた。

- (1) 全体の授業展開を意識した上で、学習目的にあった各機能を選び、それをどのように何分くらい使うか考えて授業を進める。
- (2) 次の練習に移る時は、その練習の目的を学生に説明してから行う。
- (3) 教卓の機器操作はなるべく短い時間に済ませて、なるべく学生と向き合う。
- (4) CALL の機能は必要なものを選択して使う。
- (5) 学生が主体的に参加できる機能をより多く使う。

今では、CALL は LL と比べて外見上は大きく変わったが、基本的な機能の柱はモニター機能であり、その重要性は変わっていない。CALL が提供できる機能が増えるにつれ、モニター機能は新しい機能に隠れてしまいがちだが、この点を忘れることなく授業をしていきたいと思っている。

参考文献

- Brown, H. D. (1994). *Principles of Language Learning and Teaching*. Englewood Cliffs: Prentice Hall, Inc.
- Gramley, S. (2001). *The Vocabulary of World English*. New York: Oxford University Press.
- Lightbown, Patsy M. & Nina Spada. (2014) *How Languages are Learned*. Oxford University Press. 『言語はどのように学ばれるか』 白井恭弘, 岡田雅子訳, 東京: 岩波書店.
- 杉本孝子 (2005) 「インターネットを利用した英語の語彙力強化」, 『専修大学 LL 研究室ワークショップ発表論集』, 第 7 号, 21-25. 神奈川: 専修大学 LL 研究室.
- 杉本孝子 (2015) 「CALL のモニター機能活用による学習意欲の促進」, 『専修大学外国語教育論集』 43 号, 57-69. 神奈川: 専修大学外国語教育研究室.